

## ムルク・ラージ・アーナンドの三部作について その2

—「黒い海を渡って」西部戦線に参戦したセポイの物語—

小西真弓

1940年に出版されたアーナンドの『黒い海を渡って』(*Across the Black Waters*)は、<sup>1)</sup>レマルク(Erich Maria Remarque 1898~1970年)の『西部戦線異状なし』(*Im Westen nichts Neues*, 1929年)をはじめとする第一次大戦を背景にした戦争小説・映画の中では珍しく、インドのセポイ、ラーズを主人公にした物語である。サンタヌ・ダスが述べるように、<sup>2)</sup>作者はこの作品を執筆するために、軍務に携わっていた父親の同僚の体験談や隣人のアーリア・サマージストの戦争観、自ら目撃したスペインの内乱の状況を参考にした。<sup>3)</sup>また執筆当初アーナンドはヨーロッパに滞在中で、参戦した作家たちのドキュメンタリー的な作品や軍事報告書を手し、物語を史実に即して描くこともできた。なるほど塹壕戦や新たな兵器——機関銃や戦闘機——がもたらした惨事は、イギリスの読者には既知の話であり、物語の中のセポイたちが辿る運命は想像されたかもしれない。とはいえ『黒い海を渡って』は、インド人の目にヨーロッパの社会やキリスト教徒どうしの大戦がどのように映ったのか、あるいは彼らがどのような思いでその戦いに加わり、いかなる教訓を得たかを認識させるものであったに違いない。ドイツとの緊張が再び高まり、新たな世界大戦の予兆が感じられる時世にあって、あえてアーナンドが大英帝国の軍人の士気をくじくような物語を執筆したのは、戦後もインドを植民地にしたまま再び大戦争に巻き込まうとしているイギリス政府を批判する一方で、戦争に協力しようとするインド人に覚醒を求めたかった故である。

【キーワード】セポイ、西部戦線、ムルク・ラージ・アーナンド

\*テキストにはMulk Raj Anand, *Village* (London: Jonathan Cape, 1939); *Across the Black Waters* (Delhi: Orient Papers, 2008)を使用した。本文中の括弧のタイトルの省略表記、頁数はすべてこれらの版による。

- 
- 1) 「黒い海」(the Black Waters)はベンガル語の*Kala Pani*(カーラ・パニ)の英訳。インドの大反乱以来、カーラ・パニは反逆者や犯罪者を送るアンダマン島やニコバル島を指すようにもなった。北インドの民衆は、難破の危険や国外へ出てカーストを失うことを恐れたので、「黒い海」を航海することを忌み嫌ったと言われる。An Anglo-Indian Dictionary: A Glossary of Indian Terms Used in English, and of Such English or Other Non-Indian Terms as Have Obtained Special Meanings in India, ed. by George Clifford Whitworth (London: Kegan Paul, 1885) 145; Marina Carter & Khal Torabully, *Coolitude: An Anthology of the Indian Labour Diaspora* (London: Anthem, 2002) 37, 164参照。
  - 2) Santanu Das, "Writing Empire, Fighting War: India, Great Britain and the First World War" in *India in Britain: South Asian Networks and Connections, 1858-1950*, ed. by Susheila Nasta (London: Palgrave Macmillan, 2013) 41-42; Santanu Das, "The Indian Sepoy in the First World War", <http://podcasts.ox.ac.uk/indian-sepoy-firstworld-war> (閲覧日: 2013年12月10日) 参照。
  - 3) Mulk Raj Anand, *Morning Face* (London: Arnold-Heinemann, 1968) 123-33参照。

## V

軍隊に入って5ヶ月ほどでラーが西部戦線に送られる羽目になったのは、彼の意思からではなく当局の命令によるものであった。8年間の学校教育を受けたとはいえ、文盲のセポイ仲間と同様、彼には大戦に至った海外の状況はよく理解できなかつた。大きな戦争といえば『マハーラーバタ』に描かれる戦いや、シーク戦争のようなイギリス軍がインドを征服するための討伐戦しか馴染みがなく、セポイの仕事は時に実戦に巻き込まれることはあっても、平時は国境の警備と国内の治安維持を担当することのように思われた。そのために大戦勃発時に、ラーは下記のような混乱した情報を耳にして衝撃を受ける：

8月の第1週に、フェロゼプール駐屯地の兵舎に戦争に関する漠然としたニュースや騒動を起こす噂が届き、とんでもない憶測が飛び交うようになった。

ある者は、バンドゥー族とクル族が従兄弟どうしであると同様、イギリス国王はドイツ国王の従兄弟にあたるので、黒い海の向こうの戦争はマハーラーバタ物語の戦いと似たようなものだと言った。それは人々から精神性を奪い、世界を物質主義にして破滅させる戦争ではないかと考える者もあった。また中にはドイツ国王は本当にチングス汗の権化であり、トルコのスルタンと同盟して世界にイスラム教を広めるチムールの化身でもあると信じる者さえあった。

さらに、ドイツ国王はラージパット・ライが率いたアーリア・サマージの味方であり、イギリス国王と争ってアーリアの国の覇権を奪い取り、インドを隷属状態から救ってヴェーダの信仰を広めてくれると、相変わらず信じている者もあった。(V, 329-30)

インドが巻き込まれた世界大戦について、上記のような様々な情報がパンジャブ地方に広まったエピソードからは、戦争協力を求めるイギリス政府のプロパガンダと、イギリス支配をインドから一掃しようとしたナショナリストとドイツの思惑が交錯していた状況が窺い知れる。ドイツの攻撃に対し、イギリスはフランスと同様、ベルギーにおけるドイツ兵の蛮行を強調して彼らを「フン族」呼ばわりし<sup>4)</sup>、自分たちの文明と民主主義の防衛のための戦争を正当化して、大英帝国の臣民であるインド人に協力を求めた。一方で過激なインドのナショナリストは、ヨーロッパの戦いに兵士が大量に動員される時こそ、クーデターを起こすまたとないチャンスだと捉えた。ラージパット・ライやアジット・シンがパンジャブに伝えたと言われる詩——「…ドイツが強いイギリスと開戦する日に、インドはイギリスを後ろから突き刺すだろう…」(V, 333)——には、そのようなナショナリストたちの思惑が投影されている。

ラーにはドイツ兵の野蛮性を強調する新聞の記事も、インドがドイツ国王によって救われるというような話も、真実かどうかわからなかつた。パンジャブの故郷で、小農の窮状を放置する当局への反感が高まっていたことや、ハーディング総督をねらったテロ事件(1912

4) ドイツ兵が「フン族」呼ばわりされた経緯や、彼らの野蛮を強調したプロパガンダについてはMichael Balfour, *The Kaiser and His Times* (Harmondsworth: Penguin, 1972) 226-27; Stefan Goebel, *The Great War and Medieval Memory: War, Remembrance and Medievalism in Britain and Germany, 1914-1940* (Cambridge: Cambridge UP, 2007) 209-10参照。

年)を思い出すと、挙国一致の理念——「緊急事態に面して、イギリス人、ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、拝火教徒も…イギリス国王の忠実で献身的な臣民という呼び名のもとに合体する」(V, 334)——に共感できなかつた。様々な憶測や情報が流布する中で結局、彼に理解できたのは「悪魔のようなドイツとイギリス政府が戦争を始めた」(V, 331)というニュースだけだった。

ヨーロッパの戦争に参戦する是非はともかく、泥棒の濡れ衣を着せられた身からセポイに取り立てられたラルーは、戦争に駆り出されて手足を失うのが怖くても除隊するわけにはいかなかった。もともと、戦争は長引かないという噂もあったし、それなりに戦って無事に生還すれば耕作地が与えられ、家族の借金も返せるというような話は魅力的だった。そのため彼は、槍伍長(Lance Naik)<sup>5)</sup> ロック・ナスからの不当な暴力やいじめにも耐えつつ訓練に励み、第69ライフル連隊のセポイとして、<sup>6)</sup> 具体的にどこに行くかも告げられないままカラチから船に乗り込む。

「黒い海」に船出したラルーは、国外へ出ることを宗教的タブーと見なすヒンドゥー教徒のように、神の怒りを買うことを恐れ、船が無事に目的地に着くかどうか心配した。<sup>6)</sup> しかし航海の半ばで伝えられた「キッチンナー卿がインドの2個師団のフランス行きを発表してジョージ5世を感激させた」(ABW, 7)というメッセージはイギリスびいきの彼を喜ばせた。それにしても周囲のセポイたちは、フランスという国や戦場がどこにあるのか見当もつかなかった。そのためマルセイユに着いた時、彼らは自分たちを歓迎するためにフランスの軍艦から発射された大砲の音を聞いて、戦場のすぐそばに到着したと勘違いし大慌てする。そのような初めて「黒い海」を航海したセポイたちの不安と期待の入り混じった気持ちは、次のように描かれている：

セポイたちは、初めて行く先を告げる本物のニュースによって好奇心を刺激され興奮した…「フランスはどこにあるんだ?」、「フランスってイギリスのことか?」、「敵はどこにいるんだ、ここから何マイルの所にいるんだ」…

「僕たちは黒い海を無事に渡ることができた」とラルーは不安げに独り言をつぶやいた。まるで何かの災難、即ち大海原の向こうへ行つた者全員に災難がいつ降りかかってくるかわからないという伝説的な運命を予期していたかのようなようだった…

「でも何で僕は迷信的になってそんなことを考えるんだろう」と彼は自分を叱った。彼は結局、本国(Vilayat)へ行くことになった。夢にでてくる華麗な国イギリスに…」(ABW, 7-9)

5) 第一次大戦時のインド兵の階級については、*The Indian Army in the Two World Wars*, ed. by Kaushik Roy (Boston: Brill, 2012) xvii-xx参照。ちなみに当時、インド人将校はいかに出世してもイギリス人兵士に命令を出す権限はなかった。インド人将校の主な役割は、イギリス人指揮官とインド人兵卒との間のコミュニケーションを取ることであったと言われる。

6) ラルーが配属された「第69ライフル連隊」は架空であると思われる。当時のインド軍にはこの連隊のように複数の宗教・民族別中隊(company)によって構成された連隊と、同族集団の連隊があった。どの連隊もイギリス人将校の指揮下に置かれた。ラルーはシーク教徒だったが、掟破りの断髪をしていたので、ドグラ族として「第69ライフル連隊」に配属された。西部戦線に出兵した2個師団の構成については、James Willcocks, *With the Indians in France* (London: Constable, 1920) 18-20参照。

## VI

第一次大戦以前にセポイが南アフリカや中国へ派遣されたことや、フランスがアフリカの植民地から「黒人兵士」を動員したことを考慮すると、イギリス政府が兵士不足を補うためにインド軍を西部戦線へ送り込むのも、人々の意表をつくような軍事作戦ではなかったと思われる。しかし、「白人の戦争」であった南アフリカ戦争において、インド軍が戦闘には駆り出されず労務者として使われた事実から理解できるように、<sup>7)</sup> セポイを白人のドイツ人を相手に戦わせることは、イギリス人にとって恐ろしい賭けとも考えられた。もしインド人がイギリス人やフランス人と同様にドイツ人と戦えることを悟ったら、彼らの矛先が将来インドのイギリス人に向けられるのではないかと懸念する声もあった。そのような危険を念頭に、本国の軍事局がインド軍を西部戦線へ派遣したのは、セポイの大多数がインドの「尚武の民」、即ちパンジャブのイスラム教徒とシーク教徒、ドグラ族、ヒンドゥーのジャット族、ネパールのガルワール族とグルカ族であり、彼らに対するそれなりの期待と信頼があったためである。この点に関してオマール・カリディの次のような指摘からは、イギリス当局が恣意的に選んだセポイの忠誠心をあてにして大英帝国を維持しようとし、大戦にも臨んだことが理解される：

インドの大反乱が静まった後、インド統治の軍隊は新たな募兵政策を導入した。大反乱を鎮圧するためにイギリス側を支持した者をひいきするようになった。ドグラ族、ガルワール族、パターン族、パンジャブの住民は——ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、あるいはシーク教徒のいずれであっても——「尚武の民」だ。何人かの歴史家によれば、「尚武の民」という説は大反乱以前にもあったという…「尚武の民」は背が高く、肩幅があり、肌の色が白っぽく、苦難に耐えることができるとされた…「尚武の民」とは異なり、インドの暑い平原に住む住民は非戦闘的なずんぐりむっくりの黒人で、兵士には向かないと判断された…また、安楽な生活をしたり、扇動者と分類された者たちも除外された。肉体的特長はさておき、「尚武の民」は政治的には隷属的で、当局に対して従順であると見なされた…<sup>8)</sup>

インド北西部や(現)パキスタンに *izzat* (名誉, 面目) を重視する戦闘的なイスラム教徒やシーク教徒、クシャトリア・カーストが多いためか、<sup>9)</sup> 「尚武の民」説は、イギリス人支配者にもインド人にもそれなりの説得力があった。セポイが戦場や軍人病院から家族や友人に宛てた手紙、あるいは彼らを激励する家族や友人の文書の中には、<sup>10)</sup> 宗派や民族を問わず、彼らが *izzat* を重んじていたことを浮き彫りにしているものも多い。大戦を通して大多数の

7) この点に関しては、秋田茂著「インド軍と南アフリカ戦争」『イギリス帝国とアジア国際秩序：ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』（名古屋大学出版会、2003年）76-79頁参照。

8) Omar Khalidi, "Ethnic Group Recruitment in the Indian Army: The Contrasting Cases of Sikhs, Muslims, Gurkhas and Others" in *Pacific Affairs*, Vol. 74, No. 4 (Winter 2001-2002) 530-31.

9) *izzat* に関しては、Edmund Candler, "Bow and Adore" in *Blackwood's Magazine*, Vol. 211 (1923) 201; *The Sepoy* (London: Murray, 1919) x, 55, 127, 134参照。

10) David Omissi, *Indian Voices of the Great War: Soldiers' Letters, 1914-18* (London: Mcmillan, 1999) 12, 177-78, 190 (letter 296, 319) 参照。

セポイが勇敢に戦い、敵前逃亡したりドイツ側に寝返った者がごく少数だったのも、彼らが「一旦忠誠を誓った主君に対して忠実である」(true to his salt)という「尚武の民」の *izzat* を内面化していた故であると言えよう。物語の中で、勝ち目のないような戦いに挑み、5人のドイツ兵を道づれに壮絶な死を遂げる歩兵軍曹 (Havildar) ラチマン・シンは、実際そのような最期を遂げたガンガ軍曹をモデルにしているが、<sup>11)</sup> 勇敢で義侠心にあふれた彼の性格には、作者自身の「尚武の民」精神が投影されているようにも感じられる。この小説を執筆した年代において、作者はインドの自治を求めるナショナリストであり反戦論者であった。しかし、西部戦線で肩を寄せ合って逆境を忍び、砲火の中で勇猛果敢に戦った同胞に尊敬の念を禁じえなかったに違いない。もっとも、アーリア・サマーシ活動が盛んになった当時は、軍功をあげれば農民カーストも「クシャトリア」として認知されたようで、<sup>12)</sup> ラルーのようなジャット族の農民兵士や、不可触民扱いされるマジュハビー・シーク教徒が戦場で奮闘したのはカーストを上昇させたり、ステータス・シンボルを獲得するためでもあった。<sup>13)</sup> 軍務に携わっていた父親をもつ作者にとって、そのような事情は十分に認識できたと思われる。そのために『黒い海を越えて』の中では機械戦争に巻き込まれた「尚武の民」の戦いぶりばかりではなく、彼らが参戦した社会的背景や、ヨーロッパ戦線に赴いて知の水平線を広げたエピソードも生き生きと描かれている。

## VII

未熟なラルーにはよく理解できなかったものの、インドが戦争に協力するために多額の出資や人材を提供したのは、大英帝国の枠組みの中でインド人の地位を高め、その権利を擁護する目的からであった。無知な兵士や民衆はともかく、インテリ層、あるいは士官や役人として当局に仕えたり、海外と取引のあった商人たちはイギリスの軍事力、経済力を把握していた。彼らには大英帝国に対する愛着や忠誠心がそれなりにあったかもしれないが、その心の底に政治・経済的打算があったことは否めない。また、彼らは共通の敵を相手に、自分たちが信仰や民族を問わずに「イギリス国王の忠実で献身的な民」として戦地に赴けば、インドを一つの平和な、自治を与えられるべき国にするきっかけになると期待したのではないか。そのような希望的観測もなく、かつて刃を交わしたことのないドイツ兵を相手にする戦いに、約8万9千の兵士と4万9千の労働者を差し出したり、<sup>14)</sup> 巨額の軍事費や物資を提供したとは思えない。またラルーの例からも窺い知れるようにパンジャブから多くの貧しい農民

11) Willcocks, *op. cit.*, 45参照.

12) 軍歴とカーストの問題については、藤井毅著『インド社会とカースト』(山川出版社, 2007年) 50-56頁参照.

13) 改宗前にヒンドゥーのアウトカーストだったマジュハビー・シーク教徒は、ジャット族のシーク教徒から差別されたと言われるが、軍隊を退役後にパンジャブの灌漑地を与えられ、土地所有者となった。Candler, *The Sepoy*, 40-47; Imran Ali, *The Punjab under Imperialism 1885-1947* (Princeton: Princeton UP, 1988) 112参照.

14) Authority of the Government of India, *India's Contribution to the Great War* (Calcutta: Superintendent Government Printing, 1923) 79参照.

が募兵に応じたのは、「尚武の民」の精神を刺激されたからというよりは、むしろ月11ルピーの給料と戦後に褒賞として農地を授かるためだった。当局のお粗末な農業政策のために貧窮したり、乞食になりかけた農民にとって、家族を養ったり借金の担保になった土地を取り戻すために軍隊に入ることは窮余の策だった。退役後には年金も支給されとなれば、文字も読めず肉体労働しかできない農民が軍隊に入るのも悪くはない話のように聞こえた。<sup>15)</sup> このような事情は物語の中で、かつて中国に遠征したベテランのセポイ、カーブ (Kirpu) が入隊した経緯に反映されている：

「かつては」とカーブが話を続けた。「わしと兄弟たちはラージャ・サンサル・チャンドが父に授けた40エーカーの土地を所有していた。20年前にこの連隊に入る前、カングラの丘陵地帯で干ばつがあって地代が払えなくなり、その土地は全て奪われ、イギリスのお上のものになってしまった…」  
 「ラージャ・サンサル・チャンドの時代には、有り難いことに、不作の時は年貢が免除された。それはラーマ王子の統治のようだった。しかし今、一人の人間としてできるのは、ただ従うことだけだ… わしは兵士になったんだ。だから命令には従わなければならない。お上の命令と、お上の下僕になることをわたしの宿業 (カルマ) と定めた神の命令に従うんだ。」 (V, 266-67)

「お上の命令」や「宿業」とはいえ、西部戦線に駆り出されたくないカーブの本音は、「何で俺たちが外国で戦って死ななきゃならないんだ。ヨーロッパの奴らは何で内輪もめしてるんだ。白人のお偉方に忠誠を誓ったといっても自分の魂は誰にも売らないぞ」(V, 331) という言葉に示唆されている。海外遠征を嫌がる彼の心境は、3年間の干ばつで小作の仕事を失い「お上のおかげで飢え死を免れた」という理由で、15年間ロボットのように上官の命令に従って軍隊生活を送ってきた老兵ダディー・ダノー (Daddy Dhanoo) にも共有されていた。晩年にさしかかった彼の望みは、ただ故郷の寒村ホシアルプル (Hoshiarpur) に帰って軍人年金を頼りに静かな余生を送ることであった。それがかなわず、彼が西部戦線で命を落とすのは、高齢で耳が遠く「目も霞んで寝ぼけている」のに、「将校が近づくといつも赤い目を見張らせる」ためだったのか。当局にとっては無学な老兵であっても「従順」であることが「義務」であり「宇宙の究極的な法則だ」とするダノーは、「わけの分からぬ戦争」に駆り出すには好都合な存在だったのであろう。彼は、ララーの予想が外れて兵役検査を通ってしまう。それを知った仲間たちは、薬物を使って検査にひっかかったり、賄賂を使って遠征を免れる計画をあきらめ、命令通りに船に乗り込まざるを得なくなる。そのようなセポイの経済的背景はララーを通して次のように語られている：

これらのインド軍の兵士たちは、借金まみれの小農の次男、三男、四男であり、数エーカーの土地を担保にして借りた金の利息を払うために軍隊に入った… 兵士たちはイギリス国王の戦争のために戦うと誓うことによって、警察官を追い払ったり、借金や地代を払えず捕縛された父親や兄弟を保釈してもらうために必要な威信を買うのだ。 (ABW, 168)

パンジャブの小農が貧窮して入隊した事情は、当地の行政官だったM.L.ダーリングによっ

15) 当時のセポイの待遇に関しては、George Morton Jack, “The Indian Army on the Western Front, 1914-1915: A Portrait of Collaboration” in *War in History*, XIII, No. 3 (2006) 333参照。

て報告されているものの、<sup>16)</sup>さらなる戦争協力を求める軍事局には不都合な話だった。そのためか、ウィルコックス将軍の回想録『インド人と共にフランスへ』（1920年）の中では、セポイの忠誠心や勇敢な戦いぶりが強調され、彼らの経済的背景や士気の変化についてはあまり語られていない。実際には、少数ながらも脱走兵や、ドイツ側に寝返ったり、戦線から退くために故意に自分の体を傷つけたセポイもあったと言われるが、<sup>17)</sup>そのような話もイギリス・インド双方の国にとって迷惑極まりなかった。イギリス小説の中には戦争神経症（シェル・ショック）になったイギリス兵士がしばしば登場するものの、同様な症状に悩まされたセポイの話が問題にされなかったは「尚武の民」説の維持のためであろうか。確かに戦闘で負傷したセポイたちは、イギリスの軍人病院で手厚い看護を受けたが、<sup>18)</sup>手足でも失わない限り、傷が癒えれば戦場に戻されたと言われる。彼らはいかに戦争に嫌気がさしても、命令に逆らうことができず、手紙も検閲されるので自分たちの思いを赤裸々に述べることも憚られた。中には家族や知人に戦争の実態を伝え、戦争協力を拒否させるような内容の手紙もあったが、検閲にひっかかって宛先には届かなかったものが多い。<sup>19)</sup>それらを認識していたアーナンドは、声なきセポイの代弁者として、彼らにとって西部戦線がいかに場違いで、無駄な犠牲を強いられた戦争であったかを『黒い海を渡って』を通して描いた。なるほど戦闘の様子が『マハーラーバタ』の中の戦いに喩えられたり、セポイが発するパンジャブ語の卑語（英訳）はイギリスの読者たちを困惑させるものであったに違いない。しかしそのようなインド的な語りは、彼らに「他者」と感じられるインド人が「白人の戦争」の犠牲になった意味を改めて考えさせるものであったと思われる。とはいえ、M.L.ダリングが述べるように、パンジャブの農民が入隊して社会性や節度のある生活を身につけ、新たな世界観に目覚めたとすれば、それをインド人の視点から描いているこの作品は、単なる戦争小説ではなく「黒い海を渡ったセポイの覚醒」を伝える物語のようにも感じられたであろう。

## VIII

否応なしに西部戦線へ送られたラーラーたちの士気を高めたのは、フランスの人々や文化との出会いであった。「イギリス軍人は、地面で用を足すことに慣れているインド人を劣等な『黒人』と見なして無視しがちだった」（*ABW*, 191）。故に、フランスの軍人や民衆の熱狂的な歓迎はセポイの心を暖め、自分たちの存在価値を認識させた。インドのイギリス女性とい

16) Malcolm Lyall Darling, *The Punjab Peasant in Prosperity and Debt* 2nd ed. (London: Oxford UP, 1928) 84–85, 148; Malcolm Lyall Darling, *Wisdom and Waste in the Punjab Village* (London: Oxford UP, 1934) 23–24, 75, 321 参照。

17) Santanu Das, “Introduction” and “Indians at Home, Mesopotamia and France, 1914–1918” in *Race, Empire and First World War Writing* (Cambridge: Cambridge UP, 2011) 1, 77; J. Greenhut, “The Imperial Reserve: The Indian Corps on the Western Front, 1914–15”, in *Journal of Imperial and Common Wealth History*, XII (1983) 57, 59–60 参照。

18) Das, “Writing Empire, Fighting War: India, Great Britain and the First World War”, 40–41 参照。

19) セポイの手紙の検閲については David Omissi, “Europe, through Indian Eyes: Indian Soldiers Encounter England and France, 1914–1918” in *English Historical Review*, CXXII, No. 496, 374–76 参照。

えば、原住民と目を合わせるのも嫌がる近寄り難い存在であったが、フランスの女性は町を進行するセポイに喝采を浴びせたり花束を贈るばかりではなく、スケッチのモデルになるように呼びかけてもくる。彼女たちが初対面の兵士たちに出会っても顔も隠さず、カフェでは酒を飲み、それをフランスの男性が咎めないのも驚きであった。フランスにはカースト制度がないためか、掃除人が将校にへつらう様子もなく、アフリカの黒人兵がカフェに出入りする光景も見られた。「フランス政府は黒人たちやセネガル人、ムーア人の軍団に対してイギリス人とは異なった感覚をもち、彼らが地元のカフェの女性に話かけるのを許可しているようだった」(ABW,194)。そのためかラルーは、カフェでカープや書記 (Babu) のクシ・ラム (Kushi Ram) と共に、フランス人将校からコニャックをふるまわれたり、酔っ払ってパンジャブの民謡を歌うことができた。また、スーバダール (Subadar, インド人将校) のスバー (Subah) の案内で、キャバレーを訪れた折には、それなりの費用を払えばインド人がフランス女性と肉体関係を持てることも知った。<sup>20)</sup> インドでは異人種間の男女の交わりはタブーであるのに、キャバレー勤めのフランスの女性は、ためらうことなくラルーの膝の上に乗って挑発した。さらに、インドではセポイがイギリス人の子どもに触れることは禁じられていたのに、カープがアルクの村でフランスの幼い少女を抱き上げて、誰も見咎めなかった。子どもたちはシーク兵士のターバンに驚いても逃げ出すこともなく、セポイが差し出すコインを喜んで受け取る。フランス人の対応に気をよくしたセポイたちは、自分たちの宗教的慣習も忘れがちとなり、同じ列車に乗ったフランス兵と、ブランデーの回し飲みさえするようになる。良くも悪しくもそのような異人種間の交わりは「東西が完全に理解し合えた」ような雰囲気感を漂わせるものであった。

フランス人がセポイを歓迎したのは、祖国を守るために命を危険に晒してくれる彼らが貴重な存在に思えたからで、フランスに人種差別がなかったとは言えない。しかし、フランスの東洋研究の伝統、ロティやゴーギャンの南洋への憧憬、あるいは西部戦線にイギリスはアフリカの黒人兵を動員しなかった一方で、フランス軍にはモロッコやセネガル、アルジェリアの「植民地兵」が組み入れられたことを考慮すると、フランス人はイギリス人ほど有色人種を差別しなかったように思われる。<sup>21)</sup> 実際にセポイは休戦時には度々フランスの農家で食事を賄われ、若い兵士の中には家庭婦人から息子のように身の回りの世話を受けた者もあったと言われる。<sup>22)</sup> 物語の中で、メッシヌ (Massine) の戦いから退いたラルーが、滞在先のフランスの家庭で家族のように扱われ、一家の娘マリーと手をつないで買い物に同行するエピソードも、全くの作り話とは思えない。

フランス人の歓待に感激した第69ライフル連隊のセポイたちは、当然のことながらその

---

20) *Ibid.*, 388参照。ちなみにJohn Mastersの『ラヴィの槍騎兵』には西部戦線に参戦した藩王国のインド人将校らがフランスで売春の斡旋に関わるエピソードが盛り込まれている。John Masters, *The Ravi Lancers* (London: Michael Joseph, 1972) 参照。

21) フランス人とイギリス人の人種差別の違いについては、Susanne Howe, *Novels of Empire* (New York, Columbia UP, 1949) 61参照。

22) Omissi, "Europe, through Indian Eyes: Indian Soldiers Encounter France and England, 1914-1918", 383-85参照。



社会や文化に多大な興味を示した。大多数が農民出であるためか、彼らはフランスの農村の美しい風景や優れた農業技術、誇りをもって農業にいそしむ農民の姿に感銘を受ける。そのような感想をラーは母親に宛てた手紙の中で、次のように述べている：

この国は耕運機、鉄製の道具、羊、豚、牛、雛、赤カブ、じゃがいも、りんご酒であふれています。フランスの村のフランス人や、フランドル地方のフラマン人は素晴らしい耕作者です。インド人が木製の鋤で10日かけてする仕事を、彼らはトラクターを使ってわずか一日で、しかも五倍の土地を耕します。インドでイギリス当局が開発すべき化学肥料を、ここでは沢山使ってますよ…この人々がどうしてインド農民より幸せかという、高利貸しではなく、とても低い利息で農協銀行からお金を借りているからです。(ABW, 186)

フランスとインドの牧畜・農業の格差については、土壌や気象条件などの自然環境の差も考慮しなくてはならないが、ラーのような農民セポイは、自分たちの農業や牧畜が原始的であり、小農が搾取される社会の仕組みを実感した。インドでは崇拜されるべき牛が、汚い家畜小屋で「汚物にまみれた餌を食べている」(ABW, 160)の、フランスの家畜は清潔な環境で大切に飼育され、体格もよかった。搾乳には機械が使われ、フランスの牛はインドの牛より何倍もの量のミルクを供給していた。また家畜の数がステータス・シンボルであるインドの農家とは異なり、フランスの農家は無駄な家畜を飼わない。耕作には「当局がインドに導入するべき」化学肥料や機械が使われていた。さらにパンジャブの農民の多くは学校教育と無縁な文盲だったが、フランスの農民たちは教育を受け、機械を扱って効率的に農作業をこなしたり、農業協同組合を組織していた。驚くことに、フランスでは農村の女性たちにも学校教育が施され、彼女たちは中年になっても若々しく働いていた。一方、インドの女性といえ、早婚の子沢山を余儀なくされて家に閉じ込められるせいか、「牛飼い女以外は軟弱で気力がなく若いうちに老婆ようになってしまう」(ABW, 13)。フランスの農村に滞在した農民セポイらは、無学で衛生観念の欠如した自分たちの生活を、動物の暮らしのように感じた。

ラーにとって、インドの農民たちの野蛮な生活は、盲目的な信仰によって何事も前世の因縁あるいは運命として諦め、社会の変革を求めようとしない彼らの後進性に起因しているように思われた。そのため彼は故郷に生還したら、フランスの農村を見習って因習的な自分たちの生活を改革することを夢見るようになる。そんな彼の志を高めたのは、オルレアンで見かけたジャンヌ・ダルクの彫像だった。<sup>23)</sup>ラーはクシ・ラムの解説によって、彼女が歴史の教科書に登場するオルレアン出身の農家の娘であり、「女將軍」になってイギリス軍をフランスから追い払ったことを思い出し、希望の光を見出したような気持ちになる。彼と同様にジャンヌ・ダルクの話に感激した仲間たちも、彼女を大反乱時にジャンシーを守るためにイギリス軍兵士と刃を交わしたラニー（王妃）に喩える：

…しかしラーは走り寄って、手に刀を持って頭を勇ましく前へ出し、体全体が彼女のいくつかの偉業を語っているような若い娘の彫像を見るために首を伸ばした。「ジャンヌ・ダルク」と、その

23) 実際にインド兵がオルレアンでジャンヌ・ダルク像に感激した様子は、ウィルコックスによって伝えられている。Willcocks, *op. cit.*, 25参照。

台座に刻まれていた。突然、オルレアンについて知る最後の手がかりが彼の記憶に蘇り、シアルコットのチャーチ・ミッション・スクールで読んだ『歴史の道』の中のジャンヌ・ダルクの物語を思い出した...

「それは本当の話か」と一人のセポイが尋ねた。

「そんなことがあり得るのか」と二人目が口を挟んだ。

「女将軍がイギリス軍を追っ払った！」と三人目が解説した。

そしてその少女は、ジャンシーのラニーのようなヒロインになったかのようなようだった。ラルーは、彼女のように栄光の道を歩もうと野心で血が騒ぐのを覚えた。  
(ABW, 34)

ジャンヌ・ダルクの偉業を知ったセポイたちが、一致団結すれば自分たちもイギリス軍をインドから追い払うことができると思ったかどうかは定かではない。実際に彼らの様子を目撃したウィルコックス将軍は、そのような危惧を抱かなかつた。しかし、少なくとも彼らは自分たちを支配するイギリスが無敵ではないと知ったと思われる。また「フン族」を共通の敵としていたイギリスとフランスがかつて敵対したことも、彼らには意外に感じられたであろう。それはさておき、後にドイツで捕虜生活を強いられるラルーが、当局からドイツになびいた「裏切者」扱いされて何の報償も与えられず、ナショナリズム運動に身を投じるようになることを連想すれば、ジャンヌ・ダルク像にまつわるこのエピソードは、第三部作の『剣と鎌』の伏線になっているとも言えよう。

## IX

ジャンヌ・ダルク像に出会って士気を高めたものの、戦闘体験のないラルーは、ルーアンの駅で見かけた赤十字列車内の負傷兵の姿や、消毒薬の強烈な臭いにショックを受けて卒倒してしまう。弱気になった彼を支えたのは、カープとダノーの父親のような励ましと、本国イギリスを訪れる夢であった。彼の夢は、カレーへ到着し青い海の向こうがイギリス本国だと知って膨らんだ。しかし現実の旅は、イギリス海峡を渡る遠足ではなく、閻魔の支配するような世界への行軍だった。リール付近を行軍中に、破壊された町並みを目撃したラルーは、それまで尊敬していたヨーロッパ人の良識に疑問を抱くようになる：

ラルーの正気さは、銃声の音を聞き、教会の塔を吹き飛ばす狂気を目の当たりにしても保たれた。しかし常識のある平凡な男女や、支配下におく植民地の一般民衆よりもより賢く正気なはずのイギリス人やフランス人、ドイツ人の政府が人を殺したり傷つけたり、家を破壊する戦争に関与しているとは信じられなかった。  
(ABW, 76)

信じ難いような戦争に巻き込まれたことを察したラルーは、軍隊に入ったことを後悔し始めるものの、初めて目撃する近代兵器には恐怖と共に好奇心を覚える。駐屯先のアルク村に飛んできたロケット弾の炸裂に驚嘆しつつ、それをディワリー祭りの花火に譬える。ワイストハーテ (Wystchaete) とメッシーヌの間にある塹壕に入ってから、潜望鏡が物珍しくおもちゃのように扱い、カープから叱られたりもする。また初めて目にした戦闘機には、畏敬の念を禁じ得なかった。ラルーにはそのような「驚異の物体」を作らせるドイツやイギ

リスの国王が「神の化身」のようにも感じられる。無学のダノーが戦闘機を「鋼鉄の鳥」と呼び、『ラーマーヤナ』のラーマ王子が、ランカ（スリランカ）へ行くために乗った神鳥ガルーダに譬えるのも愉快だった。さらに、イギリス人将校たちの余裕を感じさせる塹壕生活も、ラーの好奇心をくすぐる。彼らと同じ陣地で鉄砲を構えるのは、彼にとって誇らしいことであった。しかし、連隊の入った塹壕はフェロゼプールの訓練用の塹壕よりも造作が悪く、雨が降り始めると中はたちまち泥と水だらけになった。塹壕の修理や新たに穴を掘るのも辛い作業だった。イギリス人の将校たちには特別な待避壕が割り当てられても、<sup>24)</sup> セポイたちは泥の中で体を重ね合って眠ることを余儀なくされた。12月になると北フランスやフランドル地方は寒く、凍傷に悩まされたり、雪や爆撃の影響で定時に食事にありつけないことも度々だった。劣悪な環境に長く置かれることに耐え難くなった彼らは、自分たちがあたかもヒンドゥー教の地獄にいるような気になる：

…暗くて緑がかった空は、インドの賢者が伝える地獄の屋根と全く同じ色だ。そこでは罪人たちが試練を受ける。最初は貪欲でねばねばしたネズミと血を吸うヒルが一杯いる沼の中、次はトゲだらけの茂みと纏れた灌木が生える森の中をのろのろ歩き、それから裸で寒く、空腹で惨めな状態で待つという試練を受ける。彼らの罪を洗い流すことになる雨や、彼らを清める火をくぐり抜ける試練と、梵天の玉座の前で最後の審判を受けるのを待つ試練を…セポイたちは既にのろのろ歩きの行軍を長く続けて疲れていた。そして今この無限に広い宇宙の下で、彼らはあたかも突然、神々や運命の力と戦った先祖のいる世界へ移動させられたような宿命を受け入れるのを待つ段階にあった。

(ABW, 108)

煉獄のような環境に置かれたセポイたちが西部戦線に耐え抜いたのは、ヒンドゥー教徒のみならず、シーク教徒の心にも宿命的な人生観を抱いたり、転生輪廻説が浸透していたことにもよるのであろうか。<sup>25)</sup> 物語にはイスラム戦士も登場するが、彼らには名誉の戦死によって天国行きを保証されるという信仰があったと言われる。しかし、セポイたちの遭遇した戦争は、インドの神話や百年戦争、あるいはカーブが遠征したワジリスタンの戦争（1894～1895年）とは異なった。ドイツ軍陣地への突撃を命じられたセポイたちは、「銃剣で敵兵を突くか、捕虜にしろ」(ABW, 113)と命令されて突撃した途端に敵陣からの弾丸や砲弾に前進を妨げられた。そのような戦闘において、彼らは敵兵と武術を競ったり、ジャンシーのラニーのように英姿を披露する余裕はなかった。無差別に弾丸や砲弾を浴びせられるのは、怒り狂った猛獣に襲われるのと同じ様なものであった：

敵の大きなライフルや拳銃、機関銃はセポイあるいは雑役労働者たちを、有刺鉄条網や空の配給車から大急ぎで後退させた…そして敵の怒った機関銃が発する連続音は、ジャングルから飛び出して襲いかかってくる何百匹もの火を吹く凶暴なライオンや千匹の燃える虎、百万匹の象のうなり声のようになった。

(ABW, 106)

24) 連合軍側の塹壕の形態や、その中の生活については坂田邦雄編『第一次世界大戦〈上〉』〈歴史群像アーカイブ20〉(学研パブリッシング, 2011) 8-13頁参照。

25) このようなセポイたちの考え方については、Lawrence James, *Raj: The Making and Unmaking of British India* (New York: St. Martin's Griffin, 1997) 441 参照。

このように獣じみた機械戦争の中で、セポイはイギリス軍兵士と共に、次々と斃れ、戦場は広大な墓場のようになった。最初の突撃では、若いセポイのカーク (Kirk) が戦死し、目の悪いダノーは退却中に道に迷って水だめで溺死してしまう。カークの遺体は何とかララーが塹壕に引きずり込んだものの、ダノーの亡骸は敵から狙われる位置にあり、放置せざるを得なかった。仲間のセポイたちは、ヒンドゥー式の葬儀に拘っていた彼を荼毘に伏せないために、数週間たっても「昇天できないダノーの幽霊が葬儀を要求して塹壕の周りをまだうろついている」(ABW, 128) ような気持ちに取り付かれる。戦死者の葬儀どころか、兵士の身体を木っ端微塵にする機械戦争に仰天したセポイたちの士気は低下し、ベテランのラチマン・シンでさえ、「死への行進」を意味する突撃命令を出すのが嫌になる。5人のドイツ兵を道づれに戦死するラチマン・シンは「尚武の民」の鏡として称えられ勲章を授かるが、それを身に着けるべき彼がこの世に存在しないのは虚しかった。負け戦の中でセポイたちは、ドイツ軍の兵器に比べて連合軍側の兵器の機能が劣り、その数が足りないことも認識するようになる。敵の顔も見えなければ、自分たちがどこにいるのかも公式に発表されない戦いでロボットのように命令に従い、機械によって無差別に殺害されるのは、「尚武の民」の最期にふさわしくなかった。数ヶ月もたたないうちに3分の2ほどの仲間を失ったセポイたちの中には<sup>26)</sup>「銃剣で突撃して機関銃によって殺される」戦いに参戦する意味を問うようになる者もでてくる。そもそも「セポイたちはこの戦争には中立的だった。なぜならこれは彼らが受け継いだ信仰のための戦いでもなければ、血を上らせ、髪の毛を逆立たせて戦えるような理念に基づく戦争でもなかった」(ABW, 109)。

失望した何人かのセポイたちは上官の命令に嫌気がさし、タバコや酒におぼれるようになる。またドイツ軍がセポイに参戦を中止するように呼びかけるビラや、アフガン兵の敵前逃亡の話にも無関心でいられなくなってしまふ。寒さで耐えられないフェスチュベールの塹壕に移された後には、そのような気持ちが爆発したかのように、ハヌマン・シンは「卑劣なイギリス政府のために戦えない」と体調不良を理由に塹壕から出ることを拒否して、上官のサチェト・シンから射殺されてしまふ。またカークはちょっとしたジョークをロック・ナスから上官への不服従と見なされて *izzat* を傷つけられ、営倉の中で自殺する。二人の死に捨てばちな気になったララーは、敵陣に突撃するが足を撃たれて身動きができなくなり、ドイツ軍の捕虜になる。

## X

ドイツ軍の捕虜になったララーの収容所での生活が『黒い海を越えて』あるいは『剣と鎌』で全く描かれていないのは、実際に捕虜になったセポイに対する配慮によるものであろう

26) 資料によって数字のばらつきはあるが、インド政府の発表によれば、西部戦線で戦死あるいは病死したインドのセポイと従軍労働者は7,710名である。ちなみに大戦全体では53,486名のセポイと従軍労働者の命が失われた。(これらの数字は1919年12月31日までの累計であり、行方不明者は数に入っていない) Authority of Government of India, *op. cit.*, 176参照。

か。少数ながらも彼らの中にはドイツ軍から洗脳されて、インドのイギリス支配を崩壊させようとしたガダル党員になったり、トルコ軍に入隊した者もあったようで、ナショナリストのアーナンドには興味深いエピソードであったに違いない。<sup>27)</sup> しかしそのような話は「尚武の民」の *izaat* を傷つけるものである故に、物語にはされなかったように思われる。もっとも実際にはラルーのように帰国後にナショナリストになったセポイは少なかったようで、大多数はイギリス側に忠実だった。それはインド軍が、第一次大戦時ほどの熱意を示さなかったものの、第二次大戦においてもイギリスに戦争協力をしたことから理解できる。とはいえ、セポイの体験談は、ヨーロッパ人も戦場ではアジア・アフリカの「野蛮人」と変わらぬ存在になることや、「文明に光を」というスローガンに掲げた帝国主義の欺瞞を伝えるものであった。とりわけ西洋教育を受けたインド人は、聖書の教えに反する「この世の終わり」のような戦争話を聞いて幻滅し、イギリス人が剣と聖書でインドを征服したことをあらためて認識したようである。当初、戦争協力を呼びかけたガンディーやサロジニ・ナイドゥーが、戦後にナショナリズム運動の陣頭に立ったのも、いかに大戦が教育のあるインド人の西洋崇拜を損なったかを物語っている。そのようなインド人の幻滅の悲哀は『黒い海を越えて』の中では、ラルーがクリスマス停戦を目撃したり、<sup>28)</sup> 慰問にきた牧師にキリスト教徒の祈りを茶化して朗唱するエピソードを通して描かれている。

ラルーにとって、クリスマス・イブにドイツ兵がイギリス兵と戦場の無人地帯で握手をしたりケーキを配るのは意外だった。それはつかの間の出来事であったものの、ラルーはドイツ人が「ファン族」ではなくキリスト教徒であり、自分たちが巻き込まれた戦争が「聖戦」ではないことを悟る。そのためインドから慰問にきた牧師が、十字軍の兵士を募った聖ベルナルド (St. Bernard) のように自分たちの戦意を煽ることに反感を抱く。聖書には「汝の敵を愛せ」あるいは「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」とあるのに、牧師が説くように聖戦の名の下にドイツ兵を殺して神の赦しが得られるとは思えなかった。そのような気持ちを牧師やイギリス人将校に打ち明けられない彼は、ミッション・スクールで教えられた祈りの言葉を「オウム」のように朗誦して茶化し、周囲の意表を突く：

「僕はミッション・スクールでお祈りを習いました」とラルーは自分の経歴に思わずニヤリとして答えた。そしてオウムのように英語で朗誦し始めた。

「ご覧下さい、ああ最も優しく善良なイエス様、私はあなたの御前に跪きひれ伏します。そして心からあなたの卑しい下僕が、信仰と希望、慈悲を賜うようお願い申し上げます。預言者ダビデが『彼らはわが手足を貫き、わが骨をことごとく麻痺させた』とあなたが仰ったと言われる有様を目前にして、頭を下げて跪き自分の罪を真に悲しみ、あなたのそのお言葉を思い出し、あなたの受けた傷について瞑想します。」<sup>29)</sup>...

27) ドイツ軍収容所内のセポイの生活については、Heather Jones, “Imperial Captivities: Colonial Prisoners of War in Germany and the Ottoman Empire, 1914–1918” in *Das, Race, Empire and First World War Writing*, 175–93参照。

28) 西部戦線における1914年のクリスマス停戦については、John Terraine, “Christmas 1914, and After” in *History Today*, Vol. 29, Issue 12 (1979); “Christmas Truce” in *Days That Shock the World*, DVD Series 2, ed. by BBC (2013) 参照。

29) カトリック中央協議会編『公協会祈祷文』(中央出版社, 1973年) 77–78頁参考。〈本来の祈祷では「麻痺させた」(numbed)ではなく「数えた」(numbered)と祈られる。〉

「うまい、上出来だ」と牧師は言った。そしてイギリス兵たちに向かって「この祈りを唱えれば、神から大赦を賜るかもしれない」と説いた。

「煉獄に送られた者たちも、このお祈りで神の赦しを受けられますよ」とラルーは英語で言った。イギリス兵たちは、このセポイの機知に驚き、信仰心のない面白そうな表情を浮かべて笑い出した…

牧師はこの戦争が聖戦で、兵士たちが真に公正な正義の大義のために戦っていることを繰り返した…

ダーヤン・シンがラルーに牧師が何と言ったかを尋ねた時、ラルーは笑ってそのイギリスのお偉いさんは士気を高める説教をしたと言った。そして敬虔な顔を装って祈りの芝居を面白おかしく始めた：

「ああ、救世主イエス様、私たちはあなたが敵を憎むことを教え、その腹わたを裂くのを手伝って下さることを祈ります！ 私たちはあなたに手を合わせます。どうか神の息子であるあなたが父なる神に、私たちの名前が刻まれた小さな真鍮の板つきの墓を下さるように取りなして下さい…」

(ABW, 251-55)

キリスト教徒の祈りをもじるラルーに周囲のイギリス兵やオーウェン中尉が怒らないのは、牧師に対するあてこすりな気持ちに共感したためであろうか。彼らはラルー同様、ドイツ人を殺した罪が、祈りによって煉獄で清められると感じてもいなければ、その罪を「真に悲しみ」十字架のイエスの前に跪く気持ちもないように思われる。しからば煉獄に送られる兵士たちにとって牧師は、墓を守るだけの存在に過ぎないのではないだろうか。イギリスのキリスト教徒の読者が、茶番劇のような上記の場面にどのような感想を抱いたのかは定かではない。しかし戦場における布教が茶化されるこの場面は、インド人がいかにキリスト教徒どうしが戦った大戦を捉え、ヨーロッパ文明を異なる目で見ようになったかを認識させられるものであったと言えよう。それにしても物語全体としては、セポイが単なる戦争の被害者ではなく、加害者でもあるという印象が否めないのは、イギリス人将校が概して善人に描かれ、セポイを虐待するのがインド人将校であったり、ラルーがドイツ兵を銃剣で殺害してその時計を奪うというような場面が挿入されている故であろうか。また実際に「臆病者セポイ」を射殺したのはウィルコックス将軍であったにもかかわらず<sup>30)</sup>それがインド人将校の所業として書き換えられている筋立には、イギリス人読者に対する作者の配慮が感じられる。もっともアーナンドの父親が軍属の書記であったことを考慮すれば、『黒い海を渡って』の中に「悪役」のイギリス将校が登場しないのも当然かもしれない。

少年時代にナショナリストになったアーナンドは、父親との確執を通して、セポイがインドの民衆やナショナリズムにとって諸刃の剣のような存在であることを認識した。確かに父親のように軍務に就くインド人は、国内の治安を維持する役割を担うために、周囲からそれなりの威信や社会的地位を得た。しかし彼らは当局の「兵士」であるために、反英感情を抱く民衆からは「イギリス支配者の奴隷」とか「忠犬」と陰口をたたかれたり、時にナショナリズムを抑圧する暴力集団にもなり得た。インドの大反乱においてイギリスに忠誠であったセポイが、蜂起したセポイや民衆を殺害した集団であったのも記憶に新しい史実だった。また1919年に、アムリツァルのジャリアンワラー・パークに集まった丸腰の民衆を、ダイ

30) Jack, 340-41からの引用。

アー將軍の命令に従って射殺したのもセポイだった。アーナンドはそのような出来事を遺憾に思いつつ、あえてララーのような西部戦線に参戦して新たな世界観を抱いたセポイを描いたのではないだろうか。

つづく

#### 【参考文献】

- Ali, Imran. *The Punjab under Imperialism, 1885–1947* (Princeton: Princeton UP, 1988).
- Anand, Mulk Raj. *Across the Black Waters* (Delhi: Orient Papers, 2008).
- Anand, Mulk Raj. *Morning Face* (London: Arnold-Heinemann, 1968).
- Anand, Mulk Raj. *The Village* (London: Jonathan Caper, 1939).
- Authority of the Government of India, ed. *India's Contribution to the Great War* (Calcutta: Super-intendent Government Printing, 1923).
- BBC, ed. “Christmas Truce” in *Days That Shock the World*, DVD Series 2 (2013).
- Balfour, Michael. *The Kaiser and His Times* (Harmondsworth: Penguin, 1972).
- Candler, Edmund. “Bow and Adore” in *Blackwood's Magazine*, Vol. 211 (1923).
- Candler, Edmund. *The Sepoy* (London: John Murray, 1919).
- Carter, Marina and Kahl Torabully. *Coolitude: An Anthology of the Indian Labour Diaspora* (London: Anthem, 2002).
- Darling, Malcolm Lyall. *The Punjab Peasant in Prosperity and Debt*, 2nd ed. (London: Oxford UP, 1928).
- Darling, Malcolm Lyall. *Wisdom and Waste in the Punjab Village* (London: Oxford UP, 1934).
- Das, Santanu. “The Indian Sepoy in the First World War” <http://podcasts.ox.ac.uk/indian-sepoy-firstworld-war> (閲覧日：2013年12月10日).
- Das, Santanu, ed. *Race, Empire and First World War Writing* (Cambridge: Cambridge UP, 2011).
- Das, Santanu. “Writing Empire, Fighting War: India, Great Britain and the First World War” in *India in Britain: South Asian Networks and Connections, 1858–1950*, ed. by Sushelia Nasta (London: Palgrave Macmillan, 2012).
- Goebel, Stefan. *The Great War and Medieval Memory: War, Remembrance and Medievalism in Britain and Germany, 1914–1940* (Cambridge: Cambridge UP, 2007).
- Greenhut, Jeffrey. “Imperial Reserve: The Indian Corps on the Western Front, 1914–15” in *Journal of Imperial and Commonwealth History*, XII (1983).
- Howe, Susanne. *Novels of Empire* (New York: Columbia UP, 1949).
- Jack, George Morton. “The Indian Army on the Western Front, 1914–1915: A Portrait of Collaboration” in *War in History*, XIII, No. 3 (2006).
- James, Lawrence. *Raj: Making and Unmaking of British India* (New York: St. Martin Green, 1997).
- Jones, Heather. “Imperial Captivities: Colonial Prisoners of War in Germany and the Ottoman Empire, 1914–1918” in *Race, Empire and First World War Writing* (Cambridge: Cambridge UP, 2011).
- Khalidi, Omar. “Ethnic Group Recruitment in the Indian Army: The Contrasting Cases of Sikhs, Muslims, Gurkhas and Others” in *Pacific Affairs*, Vol. 74, No. 4 (Winter 2001–2002).
- Masters, John. *The Ravi Lancers* (London: Michael Joseph, 1972).
- Omissi, David. *Indian Voices of the Great War: Soldiers' Letters, 1914–18* (London: Mcmillan, 1999).
- Omissi, David. “Europe through Indian Eyes: Indian Soldiers Encounter England and France,

- 1914–1918” in *English Historical Review*, CXXII, 496, 2007.
- Roy, Kaushik ed. *The Indian Army in the Two World Wars* (Boston: Brill, 2012).
- Terraine, John. “Christmas 1914, and After” in *History Today*, Vol. 29, Issue: 12 (1979).
- Whitworth, George Clifford ed. *An Anglo-Indian Dictionary: A Glossary of Indian Terms Used in English and of Such English or Other Non-Indian Terms as Have Obtained Special Meanings in India* (London: Kegan Paul, 1885).
- Willcocks, James. *With the Indians in France* (London: Constable, 1920).

- カトリック中央協議会編『公教会祈祷文』(中央出版社, 1973年).
- 坂田邦雄編『第一次世界大戦』〈歴史群像アーカイブ20〉(学研パブリッシング, 2011年).
- 秋田茂著『イギリス帝国とアジア国際秩序：ヘゲモニー国家から帝國的な構造的権力へ』(名古屋大学出版会, 2003年).
- 藤井毅著『インド社会とカースト』〈世界史リブレット〉(山川出版社, 2007年).